

関東大震災90年によせて

榎本 喜久治

大震災との関わり

私の祖父は、明治の末、亀戸3丁目の明治通り（現在）近くに、煮豆屋（惣菜店）を開き、繁昌したという。関東大震災後、亀戸天神近くに、ガラス加工仕上業を開き、大空襲まで住んでいた（私の生育地）。

私は現職中は、教職員組合として、亀戸事件追悼会に参加することがあったが、故坪田利雄氏（追悼会会長）からの声もかかり、退職後すぐに事務局に入り現在もつづいている。フィールドワークに参加して、南葛労働会事務所（川合義虎宅）がすぐ近くにあったことを知り、祖父のころからのつながりを想像し、一生かかかっていくことになった。追悼会の



企画、運営にたずさわったが、実相を広め伝えねばと、リーフレットづくりを手がけ、今なお、生かされている。

横網町公園での虐殺された朝鮮人追悼碑前のつどいには、

亀戸事件追悼会の立場で参加を続けている。しばしば会長代行としてメッセージを述べた。いくつかの団体代表が、事件の解説や現情勢への決意を語る中、自分の認識、思いを、自分のことばと心してきた。今なお政府が、報告せず隠し続けてきたこと、古里を追われ日本に生きつづける術を求めてきた人々の人生、文字通り、ひとりひとりがなぶり殺された重さ、川合義虎らが、「民族解放・朝鮮労働者との連帯」を掲げたこと、「自由主義史観」の人々が「大虐殺ではなかった」「殺された人にも殺されただけのわけがあった」など事件の「矮小化」を論じている等々、その時の思いを述べてきた。

「関東大震災朝鮮人虐殺の国家責任を問う会」の設立

『市民の意見』117号に、山田昭次氏が文章を寄せている。2009年までの動きについてはそれに加えるものを持たない。それ以降の動きに触れる。

2010年9月、「関東大震災朝鮮人虐殺の国家責任を問う会」が設立された。1997年には弁護士連合会が発した、震災

時の朝鮮人、中国人の虐殺、この事件に関しての国の調査を求める報告書を、小泉首相（当時）に提出し、これをうけ、目的として、以下の3つを掲げた。

第一に、日本政府は責任を認め謝罪し、必要な措置を行なうこと。

第二に、日本政府は犠牲者やその遺族について調査を行なうこと。

第三に、日本政府は虐殺事件の調査結果と資料の恒久的な保存・公開を行なうこと。

会の共同代表として、姜徳相氏（在日韓人歴史資料館長）、石橋正夫氏（日朝協会会長）、山田昭次氏（立教大学教員）をふくめ、長年にわたって調査、追悼の営みを続けてきた6氏があつた。事務局長として、田中正敬氏（専修大学教授）が就任した。

90周年行事は、8月31日（土）明治大学を会場として計画された。70周年、80周年と重ねてきて、実行委員会は、山田朗氏（明治大学歴史教育協議会長）を会長に、田中正敬氏が事務局長に、昨年からは、学習会を重ねながら、運営、企画をすすめてきた。現代史研究、歴史教育、大震災研究、平和友好運動、事跡ほりおこし、継承などに関わる人々が参加している。学習会では、震災後の都市計画——同潤会にふれて——、誤殺された聾啞者、朝鮮人留学生の動向、官憲の手で払い下げられた平沢計七とのつながり——など、今まで語られることの少なかった実相を含め多岐に語ら

れている。

90周年、68周年への思い

今年、大震災90周年目の年であり、大空襲68年目である。平和運動の中心を「空襲」としている私の思いを重ねてみると、一貫して見えているのは、権力者（政府ほか）は、一切責任を認めず、実相を隠し捻じ曲げをつけていることである。大震災の扱いだけでなく「空襲」に対しても、戦争ではみんなが苦勞してきたと決めつけ、家財産だけでなく3歳で家族全員が殺された人も、幼ない兄弟3人が3年間浮浪児生活を強いられたひと、足を奪われるなどの一生をおくる人もみな「自己責任」ともいえる扱いをうけている。軍関係者には、50兆円余りという税金を支給しつづけ、「神様」扱いをしている。（戦

中の日本は、一時金だが空襲被災者に支給していたし、ドイツなど世界大戦をリードした国では、軍民区別ない補償をしている。）占領下での一切の「空襲報道」の禁止は、事実上、24年間もつづいた。その間、ルメイ空軍総司令官に「勲一等旭日大授章」を授与するなど、「人類史上」想像を絶する措置をしている。

大震災時



関東大震災時 韓国・朝鮮人殉難者追悼の碑／東京・墨田区八広

の朝鮮人虐殺に対し「関東大震災朝鮮人虐殺の国家責任を問う会」が結成され、姜徳相氏が「これでようやく日本人と手を結べるようになった」と述べたことを重く受け止めている。空襲の場合、原爆被害者には「放射能」に限定した、医療費などの救済の扱いをしている。また、8月の大規模な追悼の集い（政府はゲスト）をしてきた。

3年前、結成された全国空襲被害者連盟は、原爆・空襲の場合、「死者」を軸に、共同の目標を持ち、「補償救済」の立法化に足を踏み出した。昨年、「空襲・戦災を記録する会」の全国集会で、その点に触れ報告したが、まとめの中で、「政府の分断政策を乗り越え、踏み出した」と指摘された。運動の大きなうねりになるには、粘り強い取り組みが必要である。

長年の運動の違い、作られた偏見をのりこえるには、一層の運動がもとめられている。90周年実行委員会の学習会で講演した藤田広登氏は、「ほとんどの人が亀戸事件について知っていないことに驚いた」と語っていたが、実態は、「空襲」も同じ。あせらず、あきらめず活動をつづける思いで毎日を通している。

（えのもと・きくじ／東京空襲遺族会副会長、亀戸事件追悼会副会長）
*「関東大震災朝鮮人虐殺の国家責任を問う会」の問い合わせ先
電話080-19414-0901（田中）

*集会のご案内

関東大震災90周年記念集会——犠牲者を追悼し、史実の歪曲を許さず歴史の真実を学びあい、「今」を考える——

日時：8月31日（土）10:00から17:30

場所：明治大学駿河台キャンパス・リバティホール
主催：関東大震災90周年記念行事実行委員会

*亀戸事件 1923（大正12）年9月1日、関東大震災が起き、被災者の救援活動をしていた川合義虎、平沢計七、社会主義者、労働者ら10人が、9月3日、捕らわれ、亀戸警察署に留置された。9月5日未明、近衛師団習志野騎兵13連隊によって、刺殺された。この事件は、1ヵ月後の10月に警察により、明らかにされたが、「戒厳令下の適正な軍の行動」として不問にされた。

*川合義虎（かわい・よしとら／1902～1923）生まれは、長野県上田市。父とともに、足尾、秋田、日立などの鉱山を転々したのち上京。1922年、日本共産党の創立とともに、入党。渡辺正之輔らと南葛飾労働会を結成。関東大震災後の9月5日未明、近衛師団により刺殺された（亀戸事件）。享年21。

*平沢計七（ひらさわ・けいしち／1889～1923）生まれは、新潟県小千谷市。明治大正期の労働運動家、作家。日本鉄道時代に友愛会に入会、その後、1919年純労働者組合を結成。労働者向けの劇団を組織し、労働争議の指導に当たった。関東大震災後の9月5日未明、近衛師団により刺殺された（亀戸事件）。享年34。

*ルメイ空軍総司令官 カーチス・ルメイ（1928～1965）元アメリカ空軍大將（空軍参謀総長）。1945年3月10日の東京大空襲を指揮。（当時、少将）1964年、日本政府は、航空自衛隊の創設に寄与したとして勲二等旭日大授章を授与した。享年83。